

東欧系ユダヤ人についての断章

(「日記 2015」より)

西成彦

I

Friday

かれこれ 10 年近く前になるが、私は立命館大学の同僚のドイツ現代史研究者、高橋秀寿さんと二人で『東欧の 20 世紀』(人文書院、2006) という本を編んだことがある。2002 年の秋に立命館大学言語文化研究所主催で実施した《東欧世界は 20 世紀をどう生きたか》なる連続講座をもとにしたものである。

そもそも 21 世紀に入ってからは、「東欧」というくり自体が(とくに旧ハプスブルク帝国領であった地域を中心に)問い直され、「中欧」というくりへと看板が掛け変わる傾向にある。また旧東欧諸国の多くやバルト三国が EU に加入するというようなことが相次いで、「東欧」が歴史用語へと変貌しつつあるような気もする。しかし、少なくとも両世界大戦で主戦場(東部戦線と呼ばれた)となったこの地域は、とりわけ「20 世紀」のヨーロッパを考える上で、たびたび焦点化された。これは動かしようのない歴史的事実である。

友人の細見和之さんなどは、パリが「19 世紀の首都」(ベンヤミン)なら、「20 世紀の首都」はワルシャワだったと、しばしば発言されている(イツハク・カツェネルソン『ワルシャワ・ゲットー詩集』未知谷、2012 の「解説」など)。19 世紀的近代を呼び覚ましたのがバスターユの監獄なら、20 世紀的近代を没落においこんだのはアウシュヴィッツだったと言ってみるようなものだ。

そして、そんなワルシャワやアウシュヴィッツ(オシフィエンチム)に象徴される「東欧の 20 世紀」は、まさに「マイノリティ」という「問題」が異常なまでに肥大し、「問題」の解決のためには「マイノリティ」

そのものを抹殺する以外にないと言わんばかりの歴史が、まさかとも思える規模で「完成」しかかった時代なのだ。

《帝国と帝国、国民国家と国民国家のはざまにあって、戦時にあっても平時にあっても、不安な生活を強いられた二〇世紀「東欧」の少数民族。本書が扱うのは、「東欧」の国民国家の集積的な経験よりは、むしろ危うい生を強いられた少数民族の経験であり、そうした少数民族の経験に誠実に向き合おうとする知識人の歴史認識についてである。》(『東欧の 20 世紀』「編集後記」p. 348)

「東欧の歴史」は、「マジョリティの歴史」としてのみ書き記して終わらされることがない。「東欧」という呼称を「歴史化」してしまおうという動きが現地で強いのも、おそらくは、「マイノリティの記憶」をいつまでもひきずることへの違和感や飽和感に由来するのだろう。

しかし、私は「マイノリティ問題」との格闘を余儀なくされた「東欧」に、それでもこだわりたいのだ。「東欧」は、「国民国家」の内部に「マイノリティ」を抱えこみ、そのような国家として「国際連盟」の監視下に置かれなければならない「戦間期」を生きたばかりではない。「東欧」は、いわゆる「西欧」や「南北アメリカ諸国」に、大量の「移民・難民」を送り出した地域としても記憶されねばならないからだ。

「西欧」や「南北アメリカ諸国」において、「東欧出身者」は文句なしの「白人」として見なされはしたが、しかし「東から来たヨーロッパ人」としての差別から自由ではなかった。しかも、第一次大戦以前の「東欧系」は、ロシアやドイツやオーストリアやオスマン・

トルコの旅券をもって、西へと流れていったのだが、彼らはかならずしもロシア人やドイツ人やオーストリア人やトルコ人ではなかった。彼らは、新天地に根を下ろすプロセスのなかで、はじめてポーランド人やスロヴァキア人やユダヤ人やハンガリー人として名乗りを上げたのだ。

「帝国内のマイノリティ」であった人びとの多くが、第一次大戦後は「国民国家のマジョリティ」へと格上げされはしたものの、しかし、それは新天地にあって「新たなマイノリティ」として、厳しい同化政策の対象とされた人々を産み出すプロセスを伴っていた。

「散種」 dissemination を抜きにして「民族」 nation を語ることでできない「民族」——「東欧」とは、そうした「民族」に「国家」を持たせるという「民族自決」という原理原則が試された土地なのだ。

同論集のなかで水野博子さんは、こう書いておられる——《西側諸国が国際連盟の名において「経験の浅い」中東欧諸国を「啓蒙」するという構図が、自由主義民主主義を基礎とした国民国家体系を制度化する二〇世紀前半の時代を特徴づけている。》(p. 56)

そして、この「啓蒙」は、「ホロコースト」という荒唐治療(外科手術?)を経て、ようやく現在の安定的な国民国家をこの地域に成立させている。であればこそ、暗い過去を背負わされた「東欧」と、未来永劫に至るまで呼ばれつづけるのは御免だというわけである。

しかし、だからといって「西側諸国」は「マイノリティ問題」に関して「経験がある」と言い切れたのだろうか。「マイノリティ問題」の解決に向けて、強硬な「同化」という手段と、「多文化主義」という補助概念をしか持たない「西欧」や「南北アメリカ」の真価が問われるのはこれからなのかもしれない。

そして、きわめて厳格な「国籍条項」を有している

日本は「マイノリティ問題」に関して、いつまでたっても「経験が浅い」ままであり、かといって、いまようやく EU の一員であり、「国民国家」としての主権をも有するに至った「東欧諸国」と同じような地位に胡坐をかいてもいられない。

私には、日本がどこか「戦間期」の「東欧諸国」に近いと思えてならない。一步間違えれば「ホロコースト」が起こりかねない。

「戦後 70 年」を「帝国崩壊後 70 年」と呼び改めてみたとき、日本は何も学ばないまま、「帝国崩壊後に成立した国民国家」を 70 年続けてきたようなものだ。「ワイマール共和国」の成立後、15 年で「ナチス党」に政権を掌握させたドイツと同じ轍を踏んだわけではなかったものの、日本には「マイノリティ問題」などないと言わんばかりの空気の蔓延は、警戒を要する。

「東欧の 20 世紀」から「反面教師」として学ぶべきことは少なくない。

Sunday

『東欧の 20 世紀』には、バルカン史の佐原徹哉さんが「ブルガリアの創氏改名と脱亜主義——「民族再生プロセス」再考」という論文を寄せてくださった。バルカン史は、ユーゴ内戦の衝撃から「民族浄化」 ethnic cleansing という概念を拡大的に用いる可能性に端緒を与えてくれたし、ユダヤ系ポーランド人の法学者、ラファエル・レムキン(1900-59)が「ホロコースト」を目の当たりにして、「ジェノサイド」という言葉を発明したときに、具体的に想起していたのは、第一次大戦の混乱のなかで、オスマン・トルコ軍によってはたらかれた「アルメニア人虐殺」(1915)のような事例だった。

しかし、その「ジェノサイド」に代わる概念として「民族浄化」という言葉がさらに発明されなければならなかったのは、「ジェノサイド」は物理的な殺戮をしか指さず、ユーゴ内戦で国際的に問われたのは「マ

イノリティに対する「圧迫」の全体だったからだ。

そのときによく引かれるのが、ナチス・ドイツと結託して、建国された「クロアチア独立国」の教育相 ミレ・プダク (1889-1945) の次の言葉だ——《マイノリティたちに向けて私たちが有している銃弾は三つある。私たちはセルビア人の三分の一を殺害し、三分の一を追放し、そして残りの三分の一をカトリックに改宗させるのだ。》

つまり、土地からの追放 (= 住民交換) も、同化 (= 強制的改宗) もまた含意できる概念として「民族浄化」という概念は必要とされた。「ホロコースト」も「民族浄化」だが、「ホロコースト」のモデルでは、「追放」までは含み得ても、「同化」(これを「エスノサイド」と呼ぶこともある) までカバーはできないのだ。

そして、強圧的な国家の「同化政策」をまで含めて考えられるならば、近代日本のアイヌ同化政策から、霧社事件 (1930) への報復、南京虐殺、さらには「創氏改名」や植民地出身の慰安婦動員まで、その全体を「民族浄化」の名の下に総称するという展望が開けてくる。

東アジアの歴史認識をめぐる「思想戦」が過熱するのが、まさに 1990 年代であったことを考えると、「中=東欧史」を視野に入れながら「帝国日本」の来歴をたどり直すというスタイルの起源も明らかになるだろう。



11月7日、城西国際大学で《中欧研究とその東アジアネットワーク構築に向けて》と題するシンポジウムがあって、私もパネリストとして参加させていただいた。「東アジアで中欧史=東欧史を考える」ということの意味のひとつが、「民族浄化」という概念をどこまで歴史認識の道具として用いるかということにあるということを強く感じさせられる会だった。

韓国からお越しくくださった歴史家、林志鉉 (イム

ジジョン) さんは、「ホロコースト」の前史として、1904年、ドイツ領南西アフリカ (現在のナミビア) で発生した「ヘレロ・ナマクア虐殺」のことを強調された。20世紀最初の「大虐殺」とも呼ばれた、その植民地支配の強化政策のなかで、ドイツはすでに「強制収容所」Konzentrationslager という言葉を用いていた。「ジェノサイド」や「民族浄化」は、まさに植民地主義的な民族政策の常套手段だったのだ。そして、「中東欧」は、かつてそうした西洋列強の植民地主義的な民族政策の実験場でもあったのだということ。

東アジアの「中欧研究者」を集めたイベントであったが、こうした場合は、東アジアで開かれるかぎりにおいて、会を重ねるにつれ、もはや議論は「中欧研究」に留まるものではありえなくなっていくだろう。

Tuesday

前回取り上げたドイツ領南西アフリカでの「ヘレロ・ナマクア虐殺」については、ちょうど 10月30日に開かれた立命館国際言語文化研究所企画「連続講座：70年目の戦後史再考」の「〈第5回〉敗戦国——「零時」からの70年」で、その話題が出たばかりだった。

当日のゲストは東京外語大の岩崎稔さんと北大の小田博志さんであったが、かりに日本とドイツを比較するにしても、「敗戦国」としての両国の「賠償」を比較するというような流れには持っていきたくないという高橋秀寿さん (立命館大学) の趣旨説明もあり、結果的に「敗戦」に至るまでの両国の歩みを、「戦後」の両国社会がどう受け止めたのかという方向に議論は進んだ。「敗戦国」であればこそ、(戦勝国以上に) 過去に目を向けることができたはずだけれど、それがどこまでできたかという話である。

たしかに「敗戦国」とは言い条、両国が失ったのは、広大な版図と生活圏 (Lebensraum) にすぎず、「本源的蓄積」を大きく損なうことがなかったことは、両国の今日の繁栄を見ても分かることだ。であれば

こそ、「敗戦国」であることを大きく謳えば謳っただけ、国民のあいだに「被害者意識」ばかりが蔓延し、過去との真摯な向かいあいを妨げる危険性が生まれる。

たしかに、ドイツは第二次世界大戦中の「ホロコースト」での加害者性については、言い逃れができない形での追及を受け、それへの「謝罪」や「賠償」にも真摯に取り組んでいるように見える。しかし、「植民地支配に対する責任」とはどうかと問うたときに、まさききに話題に上るのが「20世紀最初のジェノサイド」との異名を取る「ヘレロ・ナマクア虐殺」なのだ。日本とドイツは、スペインとポルトガル、そして英・仏・オランダといった「西欧列強」に比べると「植民地争奪戦」に参入した時期が19世紀後半と、比較的遅かった（ように見える）。

しかし、そもそも古代に本州・四国・九州を統一することで国家の輪郭をなすに至った日本は、その後、「蝦夷地」や「琉球」への経済的影響力の行使を経て、それが明治に入ってから北海道及び沖縄県の領有へと繋がった。近隣の島嶼地域から、台湾・朝鮮・大陸、そして南洋へという拡大を示したのが、「帝国日本」だった。ただ、ドイツと違って、日本は第一次大戦では「戦勝国」であったために、北海道を除く「植民地」を失ったのは、1945年がはじめてだったのである。

他方、ドイツの母体は「神聖ローマ帝国」であったと言えると思うが、それはドイツ語の母体となるゲルマン語を話す住民が集住する地域を核としながらも、周縁地域をも視野に収めるものだった。また公用語がラテン語であった時代の「神聖ローマ帝国」は、まだ十分に「ドイツ」ではなかった。そんな中世期に「ドイツ騎士団」の東征が始まり、これに並行してドイツ人の東方植民（Ostsiedlung）も盛んになって、ドイツ語話者の居住地域が東へと拡大した。

そんななか、バルト海に面するケーニヒスベルク（現代のロシア領カリニングラード）に都を置く「プロイセン」がめきめきと台頭して、東方の「大国」とし

ての勢力を強めるのだ。18世紀に、オーストリアからシュレーゲン地方（現在はポーランド領）の割譲を受け、さらに「ポーランド分割」でも新しい領土を獲得したことが弾みとなって、その「プロイセン」が、「ドイツ統一」にあたっては主導的な役割を果たした。

そして、日本が明治維新後、「植民地帝国」としての歩みをスタートさせたように、ドイツは1871年の統一の後に、今度は海外植民地の獲得に向けて野心をむき出しにするのである。その意味で、1884年のベルリン会議の果たした役割は大きく、そこでドイツは中央アフリカ（現在のカメルーンとトーゴ）、南西アフリカ、東アフリカ（現在のブルンジ・ルワンダ・タンザニアの大陸部）に対する権益を獲得し、さらに太平洋の島嶼地域やニューギニア東北部の植民地化にも乗り出すようになる。「ヘレロ・ナマクア虐殺」は、そうした「第二帝国」時代のドイツが犯した「民族浄化」のなかで最も残忍なもののひとつだった。

しかし、ドイツは日本と違って、第一次世界大戦で、一旦、ほとんどすべての植民地を手放すことになる。さらにポーランド再独立の結果、「ポーランド分割」で獲得した土地も失って、西欧列強に伍する「植民地帝国」としての誇りは大きく傷つけられた。「ナチス第三帝国」が戦争遂行にあたって目標に掲げたのは、まさにそうした「失地の回復」であって、「ホロコースト」はそれに付随する目標のひとつだった。

結果として、第二次大戦でも野心を木端微塵に打ち砕かれることになったドイツは、日本と同様、かつての「領土的野心」を封印された状態で、戦後の復興に成功した。

ただ、その70年のなかで、ドイツは「ホロコースト」には真摯に向き合ってきたとしても、かつての「植民地帝国」であった時代の強欲な利益追求や人種主義的なジェノサイドに対しては、十分な反省を示しては来なかった。

と」——大西洋の向こう岸の人びとには、それが「東欧人」でした。そこにはリトアニア人やラトヴィア人から、ルーマニア人までが含まれ、そこには「アシュケナージ系ユダヤ人」も少なからず含まれていました。そして、そうした「東欧からの移民」の母語はまちまちでした。

フランツ・カフカの『失踪者』の主人公は、プラハのドイツ人という設定ですが、ニューヨーク行きの船の中には怪しげな「スロヴァキア人」も混じっていました。また、大西洋横断航路の船になかには、ルーマニア系の釜焚きも含まれていて、主人公のカール・ロスマンは、ドイツ人から差別を受ける彼らに同情を示しつつも、しかし、自分が「ドイツ人」であるというプライドは失いたくないという微妙な位置に立ちます。それが19世紀後半から20世紀初めにかけての「新移民」たちでした。

こうした観点からすると、「東欧」とは「中欧」であるドイツの「後背地」であり、民族国家の成立が遅れていた「東欧」におけるエスニシティは、国民国家という後ろ盾を持たないまま、ただその母語によってだけ規定されるもの（ナショナリティ以前のもの）でした。彼らがお互いに助け合えたとしたら、「母語」を同じくする仲間同士の助け合いに頼るしかなかったわけですから、「東欧人」は、「ドイツ人=中欧人」のそれとは隔絶されたアイデンティティを基礎にして、新天地での生活を開始したのです。

つまり、19世紀末の南北アメリカでは、「本国という国家を持たない、さまよえる東欧人」が「東欧」という抽象的な概念に内実を伴わせていたということになります。〔全文は城西中欧研究所『中欧研究』第2号に掲載予定〕

II

Friday

私が「東欧」という概念にこだわるのは、そもそもこの地域に興味を持った時代が「東西冷戦」のさなかで、それは「中欧」などという概念が一時的に

無効化していた時期であったこと、また恒文社から刊行されていた『現代東欧文学全集』に熱中したこと、こうした来歴からくる一種の「惰性」が大きいと思う。それは深く認めるしかない。

しかし、『ドイツ人の集住地域』の「東方」という意味での「東欧」は、「ドイツのユダヤ人」が、ポーランド以北・以東のユダヤ人を「東方ユダヤ人」Ostjudenと呼ぶのにもぴったり対応》するということが、私をいっそう頑迷にさせている。これも事実である。

産業革命が進むにつれて、「後進的な東欧」から「先進的な西欧」への人の流れは、ひとつの「潮流」をなすようになり、ウィーンやベルリン、そしてロンドンやパリには、「東欧人街」のようなものが目立つようになる。そして、その「東欧人」のなかには、無視できない数の「東方ユダヤ人」が含まれるようになるのである（ヨーゼフ・ロートの晩年の小説には、そうした「東欧人街」の空気が余すところなく活写されている）。

彼ら彼女らの大半は、そもそもイディッシュ語話者であったが、東欧諸語の運用能力を十分には身につけないまま、西欧言語への同化を加速させるようになった。ドイツからオランダを経てフランスにかけては、19世紀の段階で、「西方ユダヤ人」がすでに一定の地歩を固めていた地域だが（アルフレード・ドレフュスや、作家プルーストの母である旧姓ジャンヌ・クレマンヌ・ヴェイユらは、アルザスのユダヤ系）、そこに「東方」から多くのユダヤ人が新しく流れこむのだ。そして、この傾向は、第一次大戦後に一層拍車がかかる。

2015年11月2日と3日、立命館大学にお招きしたボリス・シリルニクさん（Cyrulnik は、ポーランド語やウクライナ語、イディッシュ語では理髪師=ツィルルニク）の両親は、1920年代にポーランドからフランスに移住されたユダヤ人だった。二人が家庭を構えられたボルドーは、古いシナゴグを有する歴史的な都市であったが、第二次大戦が始まると、

パリあたりからも多くのユダヤ人（東欧系やドイツ系）が「避難先」をもとめて流れこむ。そういったなか、ポーランド国籍を持つお父さまは、志願兵となって戦死され、お母さまも「ポーランド生れのユダヤ人」としてアウシュヴィッツに移送される。それを、ボリスさんだけがボルドーの由緒ある「シナゴグ」のトイレで天井に身を貼りつけながら九死に一生を得た。

この秋、シリルニクさんを京都に迎えるために、ジョルジュ・ペレックやパトリック・モディアーノ（その父親は、ギリシャ系のユダヤ人だったという）のユダヤ物にいくつか目を通したのだが、フランスという土地が、いかにさまざまなユダヤ人の交錯する場であったかをあらためて考えさせられる読書だった。

モディアーノの『1941年、パリの尋ね人』（1997）は、オーストリア系の父親とハンガリー系の母親の間に生れたフランス国籍を持つ少女の足跡を追うという物語だが、ドイツ軍占領下のフランスで「東方ユダヤ人」の扱われ方が、その出身国によって少しずつ違っていたことを思い知らされる内容だった。

そして、ふと思ったのは、第二次大戦のドイツは、東部戦線ではもちろんのこと、西部戦線においてもまた「ユダヤ人問題」に随分エネルギーを費していたという事実についてだった。フランスのユダヤ人を一網打尽にして、アウシュヴィッツに送ろうとしたドイツ占領軍は、ご丁寧に、まず彼らを「東欧」の地に送り返した上で「抹殺」しようとした。

そう言えば、ランズマン(1925-)の『ショア』（1985）には、フランス語を話す元囚人が出てくるが、彼らはギリシャのコルフ島出身のユダヤ人だった。パリの「ギリシャ人」のなかには「ユダヤ系」も含まれていた。

さまざまなオリジンを持つ「ユダヤ人」の多様さに、占領軍ユダヤ人問題担当官は、ずいぶん悩まされたに相違ない。几帳面なドイツ軍は、「ユダヤ人」という大雑把なくくりだけでなく、その出身地にも配

慮しつつ、順次「抹殺」の工程に彼ら彼女らをひきずりこんでいったのだった。

『1941年、パリの尋ね人』に登場する少女ドーラ・ブルーデルは、フランス生れだが、ハンガリー生れだった母親よりも先にアウシュヴィッツに送られた。これはおそらく偶然ではない。ハンガリーは枢軸国側に加わって、第二次世界大戦で戦っていたのが理由である。

Saturday

中世にライン河周辺で成立した書記イディッシュ語は、その後、イディッシュ語話者の東進とともに「東欧」へと浸透し、さらに19世紀後半からは、「東方ユダヤ人」の西進、東半球から西半球、北半球から南半球へという大規模な逃避行が相次いだ結果、いつの間にか、イディッシュ語文学は地球大の裾野を持つ「ボーダレス文学」としての栄華を誇る時代があった。こうしたイディッシュ文学の全貌を見渡すのに、ソロモン・リプツインの『イディッシュ文学史』（1972）は、いまもなお必携で、私も『移動文学論①イディッシュ』（作品社、1995）の執筆にあたっては、ずいぶんお世話になった。

そして、この本には「ヨーロッパの小規模センター」と題して、ルーマニアと英国とフランスでのイディッシュ文学の達成を記述した章がある。ルーマニアと言えば、ブクレシュチからワルシャワに出て活躍したイツィク・マンゲルという大詩人がいるので、比較的有名だが、英国やフランスのイディッシュ語作家など想像しにくいかもしれない。これらの地域では英語やフランス語への同化が早く、たとえば、エリ・ヴィーゼルのように、イディッシュ語で書き始めても、途中からフランス語で書き改めるといようなケースが多いために、名のあるイディッシュ詩人や作家が育ちにくかったということはあるだろう。

しかし、両大戦間期のロンドンやパリにも「東方ユダヤ人」が集住するようになり、そこではイディッ

シュ語による新聞雑誌の刊行も活発で、ジョルジュ・ペレックが《最初の記憶の舞台は祖母の店裏の部屋であるらしい。ぼくは三歳だ。部屋の中央の散らかったイディッシュ語の新聞のただ中に座っている》(『W、あるいは子供の頃の思い出』酒詰治男訳、人文書院、1995、p. 21-22) と書くことになるのも、そういった背景があつてのことである。

また 1920 年の 12 月にワルシャワで『ディブク』のイディッシュ語版初演を行なった「ヴィルネ座」は、1922 年にパリでも公演を行っている。この公演に群がった観衆は、イディッシュ語話者に限られるものではなかったとしても、少なくとも一定のイディッシュ語話者がパリでも観劇にかけつけたと考えられる。

ロシア出身の画家、マルク・シャガール (1887-1985) にとってイディッシュ語は「母語」であつたはずだし、イディッシュ文学の巨匠には、ショレム・アッシュ (1880-1957) やオイゼル・ヴァルシャフスキ (1898-1944) のように、パリを活動拠点のひとつとする者もいた。

そして、そうしたパリのイディッシュ語文芸の担い手たちは、1939 年の独仏開戦後、そして 1940 年のドイツ軍のフランス侵攻後、一部は大西洋を渡り、一部は被占領地域の各地に散らばった (モロッコに脱出した者もいた)。しかし、その多く (上記のヴァルシャフスキがそうだったが) は、ドランシー経由でアウシュヴィッツに送られた。

しかし、戦争を生き延びたなかには、逃亡生活の記憶を背負いながらもパリに舞い戻ってきた者が一定数いた。アウシュヴィッツの生き残りであつたエリ・ヴィーゼルを最初に受けとめたのも、パリのユダヤ人社会だったのである。

というわけで、つい思い立って、フランスのイディッシュ文学とはいかなるものであつたのか確かめるべく、ブエノスアイレス版『イディッシュ古典叢書 [78] 西ヨーロッパ編』(1978) をひっぱり出してきた。

そうしたら、モシェ・シュルシュテイン (1911-81) というポーランド生れのイディッシュ語詩人の「パリのミツキューヴィチ」という長編詩に遭遇。ミツキューヴィチ (1798-1855) は、ポーランド・ロマン派を代表する大詩人だが、一部にユダヤ系だという説があり、そう受けとるユダヤ人が少なくなかつた。「ポーランド民族はユダヤ民族と同じく祖国を持たない民として同類だ」という、その主張が、こうした俗説のもとになっている。次の詩句は、そういった俗説の上に出来あがつたものだと言えるだろう。

《セーヌに、歴史的な塔や橋に霧が降り
青みがかったチュールが古い骨董に膜をかけ

触れるなというかのようで、異教の神々を守護している

この地にパリの前身であるルテティアが芽を噴き

その岸辺に父祖たるガリアの民が住みついて

この河、緑がかった穏やかな川波を微といただき

杖を置いて、幕屋を張り、小屋を建てた。

そして「彼」がこの地に身を寄せた。

だからこそ、パリよ、おまえは私の愛する町なのだ。
(…)

いずれにしても、亡命ポーランド人を温かく迎え入れたパリであつたからこそ、「東欧ユダヤ人」にとつてもまた、パリは「約束の地」であつたと言わんばかりだ。

Sunday

アルプスに近いグルノーブルやその周辺地域は、2万人近い中東欧系ユダヤ人が偽造パスポートを手にしなが、占領時代を生き延びた土地として知られる (ジョルジュ・ペレックやボリス・シリルニク

が少年時代の一時期を過ごしたヴィラール・ド・ランスも、グルノーブルから遠くない)が、フランスのイディッシュ作家、イツハク・ブルシュテイン=フィネール(1908-98)が、そうした史実を背景にした作品を残している。

時代は、連合国軍がグルノーブルを解放する1944年8月の直前である。二人のユダヤ人の兄弟がいて、あたかも《野犬狩り》に怯える《野犬》のような、その日暮らしの日々を送っている。そんなある日、対独レジスタンス運動(マキ)の「カピタン」に会うために墓地に出向いた弟のフェルナンドは、ゲシュタポに捉えられる——《けがらわしいユダヤ人め! どうとうつかまえたぞ。》

このフェルナンドがはたして解放の瞬間を迎えるまで生き延びられたのかどうかを、この短篇は語っていないが、このフェルナンドが捕まったあとの拷問シーンが、妙に生々しいので引いておく——《連中は拷問の手を休めず、このまま殺されてしまうかと思った。彼は意識を喪うが、そんな彼を拷問器具は正気に戻す。痛み苦しむなかで、死に追いやられ、同時に生に引き戻される感覚だった。》

即時の処刑ではない、緩慢な拷問の時間を憂鬱なものとして描いた文章として、これは、どこかカフカの『流刑地にて』(1919)を思わせる(カフカはそれをあくまでも傍観者の視点から描くのだが)。

ところが、この「二人兄弟」と題する短篇が秀逸なのは、このままだと悲惨な「拷問死」で終わってしまいかねない物語を、「牧歌」的な恋愛物語と表裏で縫い合わせるようにして描いている点にある。

同じ朝、隠れ処から出た兄のボリスは、その夏の日をプールサイドで過ごし、青い眼をした、スタイルのいい絶世の美女と知り合って意気投合する。

要するに、ユダヤ人としての逃亡生活を彩る明と暗を強いコントラストとともに描き分けたのが「二人兄弟」なのである。そして、小説は、まったく違っ

た一日を送った二人が、日が暮れた後にぼったり鉢合わせするところで終わる。

前に挙げたソロモン・リプツインの『イディッシュ文学史』によれば、作者のフィネールは、みずから占領時代を通じて、レジスタンスを闘った人物であったという。そんな彼であつたればこそその「死」と「牧歌」のあいだをさまよった日々記憶がこうした作品を彼に書かせたのだろう。

Tuesday

ジョルジュ・ペレックに『エリス島物語』(1980/1994)というドキュメンタリー・タッチの作品がある(もともと映画用のシナリオだったという)。ペレック自身がニューヨークに乗りこんで、かつて「エリス島」を経由して合衆国に入国した生き残りの老人たちにインタビューし、「移民」の真実に迫ろうとした作品だが、これは言うてみれば、ペレック自身が、ありえたかもしれない別の人生(とくに両親がたどったかもしれない別の人生)を具体的にイメージするために試みた「突撃取材」の記録であった。

その「取材」の対象者は、東欧ユダヤ系が多くを占めているが、イタリア系も含まれていて、ペレックが個人史の延長としてのみ、この企画に乗ったわけでないことは明らかだ。しかし、かといって、ロシアやウクライナやポーランドから(フランスではなく)合衆国に「移住」したことで、生き延びることのできた世代に対して、そのインタビューは、まさに「ありえた父」「ありえた母」を前にしているかのような切迫感を伴っているように読める。まさに「失踪」disparaîtreした両親との再会を夢想するような調子なのである。

そういえば、第二次大戦中、アルプスに近いヴィラール・ド・ランスという町で彼が預けられた《養家のメンバー》のなかには《合州国への移住を選》んだものが三分の一ほどいたらしく、《選ばなかった〔中略〕三分の二に当たる人たちが〔中略〕占領されたフランスのいたるところから、さらにはときにはもっ

と遠く、たとえばベルギーからやって来て、ヴィラール・ド・ランスに疎開し》てきていた。そういうことだったようだ(前掲『W、あるいは子供の頃の思い出』、p. 106)。

フランスから「失踪」するという運命に呑みこまれた者と、フランスですれでも何とか生き延びた者と、合衆国で生き延びた者と、この三つに、ペレックの親類や縁者の運命は、枝分かれしたのだ(《イスラエルにひと財産作りに発った》(p. 43) 伯父もいたらしい)。

しかし、ペレックにとって、彼らはみな東欧に出自を持つ「東欧系ユダヤ人」だった。1978年のニューヨークで、古い移民の老人にインタビューを行うペレックの情熱は、彼ら彼女らがどう生き延びかを知ろうとする以上に、なぜ「東欧」から出なければならなかったかを聞きただすことに向けられたのだ。

たとえば、ペレックは、自分の母親一家がポーランドからパリにやって来たという以上の事実を聴き知る前に、彼女を奪われてしまった。彼女は《死ぬ前に故国をもう一度見》て、そのポーランドで亡くなったはずのだが、息子のペレックからすれば、彼女が命を奪われた土地としてのポーランドのことよりも、彼女の一家がそもそもポーランドを後にしなければならなかった理由に、むしろ関心を抱いたのではないだろうか。

その意味で、『エリス島物語』を完成させる過程は、ペレックにとって、一種の代償行為だった。

《六歳のころまで暮らしたクズミン、それからプロスクーロフで、教えられていた唯一のことは、だれも信用しなきゃならないということ、とりわけ外国人はそうだということでしたから。プロスクーロフではピウスーツキが仕組んだ大量虐殺がありましたが、憶えているのは、あまりにも恐怖のなかで暮らしたのために、すでにこの地にいるのに〔中略〕扉がきしむたびにぎくっとするのが止むのに何週間もかかった》(酒詰治男訳、青土社、2000、p. 122)。

——クズミンやプロスクーロフは、ウクライナの地名(プロスクーロフは、現在のフメリニツキー)だが、1919年、ピウスーツキ将軍が侵攻して、その過程でユダヤ人を虐殺したという噂は、ユダヤ人のあいだに広く存在した。

《わたしはオーストリア皇帝フランツ＝ヨーゼフの統治下に生まれました。その後帝国は崩壊しました〔中略〕それからウクライナ人たちが、デニーキン、ペトリューラがやってきました。そうしてユダヤ人にとっては暮らしていくことが不可能になりました》(p. 140)

——ピウスーツキの率いるポーランド軍が侵攻したウクライナでは、モスクワを追われて南下した「白軍」やウクライナ独立軍もまたユダヤ人をスケープゴートとみなした。

《わたしは国中を歩き回り、ユダヤ人、非ユダヤ人を問わず多くの人たちに会いましたが、いたるところで憎悪と反ユダヤ主義に出くわすのでした。》(p. 141)

——これはポーランド時代の話である。

《当時わたしたちはツァーリのロシアに暮らしていました。それから第一次大戦がありました。兄弟のうち二人が参戦しました。パリに家族と暮らしている妹と、ベッサラビアの村に住んでいるほう一人の妹がおりました。両親は戦時中になくなりました。1917年に社会主義革命があり、それである意味でわたしたちはとても幸せでした。なぜならわたしたちは虐げられていましたし、たくさんの大虐殺に遭っていたからです。しかし少し後に、ベッサラビアはファシズムのルーマニアに併合されてしまいました。〔中略〕多くの若者がベッサラビアを離れました》(p. 170)

——ベッサラビアとは、現在のモルドヴァ。

1920年前後に「東欧」の地を離れたユダヤ人は、

世界へと散らばった。ドイツへ、フランスへ、イギリスへ、またパレスチナへ、北米・南米・南アフリカへ。そうした「離散」の原点をベレックは、ニューヨークへの取材旅行でつきとめようとした。取材対象者のあいだには、「新天地」としての合衆国を持ち上げようとするあまり、ことさらに「東欧」を貶める傾向があったに違いないが、いずれにしても「東欧」を後にしたユダヤ人が、「ホロコースト」を生き延びた後に語る「過去」とは、このようなものだったのだ。

ベレックの父や母が生きていたら、ベレックに聞かせたに違いないのも、このような来歴だったのだろう。ただ、フランスで過酷な占領期を生き延びた「東欧ユダヤ人」が「原郷」としての「東欧」を語る語り口はまた違っていたのかもしれないが。

Wednesday

11月13日の夜、パリで起こった同時テロのニュースを聞いたときに、まず思ったのは、「13日の金曜日」に狙いを定めた攻撃のかもしれないということだったが、事情通に言わせれば、これは第一次世界大戦終結後の英仏連合軍によるイスタンブール占領が始まった日付でもあるのだという。

第一次世界大戦の終結（欧州では1918年の11月11日）は、ポーランドをはじめとする東欧諸国には、晴れて独立という恵みをもたらしたのだが、オスマン帝国にとっては、帝国の崩壊であるとともに、帝国領であった広大な地域の英仏両国による割譲という屈辱的な経験をもたらすものであった。「民族自決」というスローガンが活かされたのは、ヨーロッパのなかだけにすぎなかった。

そして、1920年のセーヴル条約以降、シリア（今日のレバノンを含む）はフランスの委任統治下に置かれた。イラクとパレスチナが英国の委任統治下に置かれたのも同じ条約によってだ。そういう過去をふり返らないまま、文明と野蛮の図式だけでテロ掃討がおこなわれていくのは、「これが未来志向」と

いうことかと暗澹たる気持ちになる。平和とは文明を名乗る国家の軍隊や警察権力が圧倒的な法維持的暴力によって地域を「平定」することでしかないのだとしても。

ともあれ、第一次世界大戦の終わりは、中東地域の人々にとっては、新しい植民地支配の始まりを意味したが、じつは東欧諸国（とくにポーランドやルーマニア）のユダヤ人にとっても、そうした諸国の独立は、結果的にナショナリズムを高揚させた結果として、かえっていっそう生きづらい時代の到来を意味したのである。

もちろん、それでもポーランドに同化する道を選んだエリートもいたし、生れ育った土地にしがみつき、それが「ポーランド領」であることを受け入れて、「郷里」を優先したユダヤ人も少なくなかった。であればこそ、第二次大戦の勃発時に、300万人ものユダヤ人がポーランドに住んでいたのだ。

しかし、その後の「ホロコースト」で滅ぼされた「ヨーロッパのユダヤ人」のなかには、もともと「ポーランド出身だったユダヤ人とその子ども」が多数含まれていた。ジョルジュ・ベレックやボリス・シリルニクは、「ポーランド」への「送還」を運よく免れた「ヨーロッパのユダヤ人」にすぎなかった。少なくとも彼らは奇跡的な生き残りであって、1920年前後にポーランドを出た「ユダヤ人とその子ども」は、その大半が「抹殺」されるためだけにドイツ軍占領下のポーランドに送り返されたのだった。

ベレックやシリルニクよりもひとまわり年上で、「ポーランド系ユダヤ人」の子として生れたアンドレ・シュヴァルツバルト（1928-2006）は、ドイツ軍占領下のフランスでパルチザンに加わりながら、自身は生き延びたものの、両親はアウシュヴィッツ送りになった。しかも、戦後もフランスに留まって、作家を目指すようになった彼は、『最後の正義の人』（1959）で、センセーショナルなデビューを飾ったのだが、そこで彼は自分と等身大のユダヤ人を描くのではなく、みずからもまた家族とともにアウシュ

ヴィッツ送りとなった「フランス生れの東欧系ユダヤ人」の青年を描いたのだった。

その父は、生まれ故郷が「ポーランド」になった時期に「ポーランド脱出」を考える。まさに「反ユダヤ主義的」なポグロムが絶えなかった時代のポーランドからだ。移住先は英国でも米国でもフランスでもよかったはずだが、選んだ国はドイツだった。ドイツの「シュティレンシュタット」Stillenstadtという町で静かに暮らしていた父は、家庭を設け、子どもをも授かる。ところが、そこにナチが台頭し、やむなく彼らはフランスに逃げ場を求めることになる。ポーランドよりもドイツがマシだと考えた判断は誤りだった。

ところが、ドイツで「ユダヤ人」と見なされていた者が、フランスに渡ったとたん今度は「ドイツ人」の扱いを受ける。であればこそ、主人公のエルニは、「外人部隊」に志願してでも「ドイツ人」としての肩書を返上しようと必死になる。しかし、そんなフランスも、いったんドイツに占領されてしまえば、どんなに「フランス人」としてふるまおうとしても、やっぱり「ユダヤ人」でしかない。ハナ・アーレントにも似た「不条理」を経験したエルニは、大西洋の向こう側に逃げる余裕はないまま、望まずして「父祖の地」であったポーランドに送り返され、「ガス室」が終焉の場所となった。

どこにあっても結局は「異邦人」でありつづけるしかなかった一家にとって、「出身地」であったポーランドが図らずも「終焉の地」でもあったという「アイロニー」。『最後の正義の人』がフランスでベストセラーになったのは、「異邦から来て異邦に帰っていく者」たちへのフランス人ならではの共感とともに、そうした「共感」に訴えてでも「フランスへの帰属」を希求しようとした「ユダヤ人作家」の情熱に対するフランス的な応答でもあったのだろう。

しかし、アンドレ・シュヴァルツバルト自身は、結局はフランス本国を離れ、カリブ海のグアドループで息を引き取るようになったし、フランスはすべての異

邦人」に「同化」を促して、それに成功した国ではない。「異邦人」を受け入れつつ、しかも、その国家を完全に「平定」ということは、きわめて困難なことなのである。

20年以上前のアルフォンソ・リングスの言葉が、今さらのように身に沁みる——《私たちの世代は、つきつめれば、カンボジアやソマリアの人びと、そして私たち自身の都市の路上で生活する、社会から追放された人びとを見捨てることによって、今まさに審判を受けているのだ》（『何も共有していない者たちの共同体』野谷啓二訳、洛北出版、2006、p. 12）

「審判を受け」なければならない人間は、自分が誰を「見捨て」ているのかをまず考えなければ、その「審判」の場から逃げ出せない。

話を戻せば、アウシュヴィッツで「抹殺」された「異邦人」たちは、どこでどんなにあがいても「見捨て」られている自分に呆然とさせられるしかない人々だった。第一次世界大戦の結果を受けて独立したばかりのポーランドを棄てたユダヤ人の「終焉の地」がアウシュヴィッツでなければならなかった運命を、ポーランド人は決して「不運」だなどと考えるはならないのだ。むしろ、ポーランド人は幸福だ。自分が一旦は「見捨て」た人々が目の前で、それこそ目の背けようのない形で、死んでいってくれたのだから。

私のなかの「ポーランド人」の胸が騒ぐ。

そして、植民地を手放した後も、旧植民地から多くの移民を受け入れてきたフランスが、「人種主義」から自由でありえないことの帰結としてテロの連鎖に苦しむさまは、「脱植民地化」という道の困難さを語ってあまりあると感じる。

III

Wednesday

ジャン＝ジャック・ゴールドマン（1952-）は、フラン

ス語圏できわめて有名なユダヤ系のシンガーソングライターだ。セリーヌ・ディオンに曲を提供したりもしているから、日本でもよく知られる。

以下はその「アブラハムの記憶」である。

♪♪いまこそひとつ祈りたい

物事、そして父祖たちの命ずるままに

立ち去る前に

いまこそひとつ、忘却に侵されることのない人生を

アブラハムの記憶のなかに

刃で刻んだ以上の刻印を刻みこまれた人生を

その時は待つには長い

胸の苦しみは重い

汝への愛と信仰は大きい

しかし汝が理解できない日もある♪♪

（"juste" をここでは文脈から「いまこそ」と訳したが、「正義の」の意味をも持つ "juste" という言葉の響きが美しい）

Juste une prière avant d'obéir

À l'ordre des choses et de nos pères

Avant de partir

Juste une autre vie sauvée de l'oubli

Gravée bien mieux que par une lame

Dans la mémoire d'Abraham

Longue l'attente de l'heure

Lourde la peine en nos coeurs

Mais si grands notre amour notre foi en toi

Et difficile de te comprendre parfois

（中略）

♪♪われらが子を時間の果てへ導きたまえ

涙よりも喜びに満ちた子らを

アブラハムの記憶よ♪♪

Conduis nos enfants pour la fin des temps

Remplis de plus de joies que de larmes

La mémoire d'Abraham

じつは、この歌には下敷きになった小説がある。ポーランド生れの作家、マレク・アルテール（1935- ）に、まったく同じ題の小説『アブラハムの記憶』（1983）があるのである。ここでのアブラハムは「旧約聖書」に出てくるアブラハムではない。紀元 70 年、ユダヤ王国がローマによる攻撃を受け、神殿が破壊された際に、妻を強姦され、虐殺されたアブラハムの記憶と、ワルシャワ・ゲットー蜂起で命を落とした 20 世紀ユダヤ人を重ね合わせたこの本は、欧米圏でベストセラーとなり、500 万部以上を売ったという。

日本でアルテールが紹介されたのは、元・在リトアニア領事、杉原千畝を含む、「ホロコースト」からユダヤ人を救出した「正義の人々」を世に知らしめた渾身のルポルタージュ『救出者——なぜユダヤ人を助けたか』（1995；幸田礼雅訳、NHK ブックス、1997）がきっかけで、その後は「旧約聖書」に取材した『美しき呪いの女』（2003）や『モーセを愛した女』（2004）などが藤本優子訳（2004-5）で、ソニーマガジズから出されてはいるが、出世作の『アブラハムの記憶』は、いまだ未紹介だ。

このことは、フランスで「東欧ユダヤ系の文学」が一定の地位を占めていることに対する関心が日本では薄いことに起因しているのかもしれない。これまたベストセラーとなったアンドレ・シュヴァルツバルトの『最後の正義の人』に翻訳がないのとも、たぶん連動している。

「東欧系ユダヤ人」の表現が庶民レベルにまで深く浸透しているフランスで、旧植民地系の異教徒たち

の存在が「異物」のままであることと、シャルリー・エブド事件や、今回のテロとは無関係ではないはずである。

名だたる「共和主義」を掲げるフランスがこれから成し遂げるべきことは、ユダヤ教徒とイスラム教徒の分断を仕組むことでキリスト教世界の繁栄と安定を築こうとした近現代の「西洋世界」を代表して、その過去をじっくりとふり返り、今後の関係修復に向けて青写真を示すことなのだと思う（東アジアで日本がなすべきこともこれに類似する）。

言うは易いが行うは難しい。それはそうだが、有言実行、まずは言葉に出すことが重要だと思う。

Friday

名古屋大学の田所光男さんが、2002年に書かれた文章に、「シヨア後のフランスに生きる東欧ユダヤ移民のアイデンティティ」(『絃説』II-3、花書院、2002) というものがある。

前便で触れたジャン・ジャック・ゴールドマンの話から始まり、それから兄のピエール(1944-79)へと話題が進む。それは、ゴールドマン兄弟をまとめて紹介した、日本で初めての論文である。

二人の父親は両大戦間期にポーランドからフランスに旅券なしで移民し、第二次大戦中はレジスタンスを闘った人物だが、ピエールを産んだ母親は、ポーランド系で、彼女は、戦後、コミュニストとしてポーランドに帰国したらしく、ジャン・ジャックの方の母親はドイツ系のユダヤ女性だという。

ピエール・ゴールドマンは、ちょうど「五月革命」の時代に20代半ばで、パリで精力的に活動し、革命が鎮静化すると、今度は《ベネズエラのゲリラ組織に加わり》、そして帰国後に《三件の強盗と二人の殺害》の容疑で《無期懲役を宣告され》(p. 108)、周囲を驚かせた人物である。しかも、獄中で書きあげられた『フランスに生まれたポーランド系ユダヤ

人の不分明な記憶』(1975)が話題になり、それこそジャン・ジュネ、もしくは永山則夫さながらなのだ。田所さんは、この著作を深く読みこみながら、《彼の自己意識を深いところで決定しているのは、家族をはじめとする、ユダヤ人同胞の抵抗と犠牲の記憶である》(p. 109)とまとめておられる。

そして、獄中のピエールの許を訪ねた或る法律家は、ピエールから次のような言葉を引き出したという——《私が自分のユダヤ性を主張する唯一のやり方は、変わらぬパーリアになることでした。私は死体焼却炉の匂いの中で生まれました。私は若い時ずっと、ワルシャワ・ゲットーの蜂起の雰囲気を再現したいと思っていました。苦しみとヒロイズムです…》(p. 110)

同様の「ワルシャワ・ゲットー蜂起コンプレックス」は、『最後の正義の人』にもすでに見え隠れしているが、ピエール・ゴールドマンは、「正義の人のひとり」(ユダヤの伝承では世界には常時、36人の「正義の人」がいるとされている)をみずから生きようとした。

ピエール・ゴールドマンは、まもなく暗殺されて世を去るが、亡くなる前に、もうひとつの自伝的作品『アルシバルド・ラポポールのありふれた不運』(1979)を残して、謎に包まれながらも、いまだ戦後フランス文学史のなかに、その名前は深く刻みこまれている。

その破天荒な一生のなか、1970年後半には、雑誌『現代(レタンモデルヌ)』を通じて、クロード・ランズマンとも交流があったとかで、前便で触れたマレク・アルテールを含め、戦後のフランス文壇で、彼ら「東欧系ユダヤ人」が示した存在感は、哲学界でエマニュエル・レヴィナスの存在感に勝るとも劣らず大きなものであったと分かる。

私はこれまでついポーランドの側からだけ「ワルシャワ・ゲットー蜂起」を見てきたところがあるが、フランスのユダヤ系表現者にとって、フランスで対独レジスタンスを闘った者と、ワルシャワ・ゲットーの

戦士を結びつけようとする想像力のはたらきは、思いがけないほど必然的で、力強いものであったらしいと分かった。

ランズマンの『ショア』が制作された時代には、一方で、こうしたユダヤ系フランス人のさまざまな知的活動があったのである。

しかし2010年代も半ばを過ぎたいま、ユダヤ系フランス人は「ワルシャワ・ゲットー蜂起の雰囲気」に立ち返るといって済まされないだろう。11月に京都へお招きした「東欧系ユダヤ人二世」のボリス・シリユルニクさんも、シャルリー・エブド事件以降のフランスの状況には深く胸を痛めておられるようだったが、なぜパリであのような事件が相次ぐのかと、ユダヤ系から一般のフランス人まで、誰もが自問しなければならないのだ。

「ファシスト＝悪」、「テロリスト＝悪」と言って済む問題ではないのだから。それは、「西洋中心的世界文明」の蹉跎として捉えるところから始めなければならぬ。

Saturday

戦後フランスのユダヤ系の表現者にとって、「ワルシャワ・ゲットー蜂起」がいかに一個の伝説と化していたかは、ランズマンの『ショア』を観るだけでも十分に伝わってくる。

ユダヤ人評議会の議長として自害したアダム・チュルニャクフ(1880-1942)の「日記」(仏訳)の朗読に始まり、「ゲットー戦士」の生き残りであったイツハク・ツケルマン(1915-81)へのインタビューを経て、ロンドン亡命政府側の密使として占領下のワルシャワを訪ね、ゲットーへと潜入した日の記憶を涙まじりに語るヤン・カルスキ(1914-2000)への長時間取材まで、「ワルシャワ・ゲットー蜂起」という主題は、9時間以上に及ぶドキュメンタリーのなかで重要な柱の一つになっている。同じ時期に占領下のフランスでレジスタンスを闘っていたランズマンにとっ

て、それは自分の「分身」たちの戦い、それもいっそう絶望的で神話的な戦いでもあったのだろう。

前便で触れたピエール・ゴールドマンが自分を「ゲットー戦士」になぞらえて、戦後のフランスでの「闘い」に身を投じようとしたのも、そうした「ゲットー蜂起コンプレックス」のあらわれだと思う。

そして、もうひとりの「東欧ユダヤ系フランス人」であるアンドレ・シュヴァルツバルトもまた、くり返し「ゲットー蜂起」に思いを馳せたにちがいない「東欧ユダヤ系」の作家だった。

私がこの作家について知ったのは、カリブ海地域の「クレオール」に関心を持つようになった1989年以降で、フランス植民地グアドループでの奴隷反乱を扱った小説『混血女性ソリチュード』(1972)に最初に興味を覚え、出世作である『最後の正義の人』は、その後に知った。しかし、彼は『ソリチュード』においても、その「エピソード」において、「ワルシャワ・ゲットー」にちらっと触れているのである。

以下は、その抄訳である。大なり小なり「ジェノサイド」の地においては未来永劫まで消え去ることのない、過去の亡霊たちの気配に敏感であろうとする姿勢が、「ホロコースト」から「奴隷制」に至るまで股にかけながら現代文学の可能性を追求したシュヴァルツバルトという作家の基本姿勢だった。

ちなみに、「マトゥーバ」は、1802年に奴隷反乱があった地名である。反乱軍に加わった女性主人公は、妊娠中であったため、出産の日まで待って、その翌日に処刑された。

《マトゥーバの丘に向かってしなやかなカーブを描いて村道が通るようになってから数年になる。これから観光が盛んになれば、道は火口にまで延び、カルデラの際まで肉迫できるようになるだろう。〔県庁所在地である〕バス・テールから花々の咲き誇る道筋の民家を抜けて登ってきた旅行者は、現在のマトゥーバからほんの少し離れた場所でふと足を止め

るだろう。〔中略〕そして、ある記憶に敬意を表しようと思うとき、彼は周囲の空気を想像力で満たすだろう。そして運がよければ、数々の人像がその周りを取り囲むに違いないのだ。辱められたワルシャワ・ゲッターの廃墟をさまよう亡霊たちが、訪問した旅行者たちの目の前に立ち現われるとはよく言ったものだ。》

Sunday

私が『ショア』を最初に観たのは、日本での公開前に日本語字幕のお手伝いをさせていただいた1995年のはじめだったが、その頃は、フランス語と英語とドイツ語しか話さず、その他の言語には(女性の)通訳をつけて取材に臨むしかないランズマンの姿が、至極当然のこのように思っていた。かりに監督が「東欧ユダヤ系」であったとしても、フランス生れ、フランス育ちの彼には、東欧諸言語(ポーランド語などのスラヴ語やイディッシュ語)は、しょせん「外国語」でしかないのだろう。ただ、そんなふうに思っていた。

もちろん、映画の前半に出てくるシモン・スレブルニク(1930-2006)が、マイクオフではあっても、ポーランド人の女性たちと親しげに言葉を交わすシーンを眺めながら、スレブルニクにとってポーランド語は「外国語」などではないことを痛感させられたのだが、フランス生れのランズマンの場合はやむをえないと思っていたわけだ。

しかし、前に取り上げたアンドレ・シュヴァルツバルトは、フランス東部のメス生れだとは言っても、ドイツ軍占領下にレジスタンスに参加するまではフランス語があまりできなかったという。これを知ったときに、そういうこともあるのかと思った覚えがある。「東欧ユダヤ系の二世」である場合には、フランス人でも「母語」がフランス語でないことがありうる、ということだった。

ましてや、マレク・アルテールのようにポーランド語(やイディッシュ語)を話す家族とともに戦争を生き

延び、15歳にもなってからフランスにやって来た「一世」であれば、ポーランドに里帰りを果たしたとしても言葉に不自由することはなかったはずなのである。『救出者——なぜユダヤ人を助けたか』を執筆するかたわら、それこそ『ショア』に対抗するかのよう、『正義の人(ツァデク)』(1994)というドキュメンタリーをまで制作していたアルテールは、ポーランドでの取材に際して、通訳を雇う必要などなかったはずである。

そうしたことを考えると、ランズマンがポーランド語やイディッシュ語に手も足も出ず、それらにいかなる郷愁も抱いていそうにないことが、しだいに不可解なことであるかのように思えてきた。先日、京都へお越しいただいたボリス・シリルニクさんですら、「東欧ユダヤ系」の「二世」でいらっしやっただから、ポーランド語やイディッシュ語を話そうとされはしなかったものの、自分の親がそうした言語を話していたということを懐かしげに回想されていた。日本人の私がポーランド語やイディッシュ語を理解することに、ずいぶん感銘を受けられたようでもあった。

それでは、ランズマンは何故に、ポーランド語やイディッシュ語を、しょせん「外国語」としてしか認知できないのだろうか？

そこでふとウィキペディアを調べてみたら、彼は「東欧ユダヤ系」の「二世」ではなく「三世」だったと分かった。

父親のアルマン・ランズマンは、19世紀末(フランスがドレフュス事件で大騒ぎになっていた時代)にミンスク(現在のベラルーシ)近郊のシュテトルからパリにでてきた男と、リガ(現在のラトヴィア)から出てきた女性とのあいだにフランスで生まれている(1900年)。

他方、母親のポーレットは、ベッサラビア(現在のモルドヴァ)のチシナウ(ロシア語ではキシニェフ)で結ばれた両親の下、オデッサからマルセイユへと向かう船のなかで生まれた(1903年)のだという。

両親はともに東欧の言語を少なくとも「母語」のひとつとされてはいたはずだが、その息子であるランズマンにまでそうした東欧の言語は「継承」されなかった。

映画の大半がポーランド・ロケからなっている『ショア』のなかで、ランズマンが、どこまでも「よそ者」にしか見えないのは、彼が「よそ者」を演じていたからではなく、「よそ者」でありながら、「ショア」のことが頭から離れないという意味での「ユダヤ系」であったからだ。

つい先日まで知らなかったマレク・アルテールという存在を新たに知ったことで、ランズマンについての謎がひとつ解けたような気がする。戦後のフランスで「ショア=ホロコースト」や「ゲットー蜂起」にとりつかれたユダヤ系の表現者のなかで、ランズマンはとりわけ「東欧」に何ら郷愁を感じない世代に属していたのだということ。そのことが、良くも悪しくも『ショア』という映画に、残酷なまでの冷徹さを充満させている。

IV

Tuesday

ベルナルド・クシンスキーの『K. 消えた娘を追って』（花伝社、2015）を翻訳者の小高利根子さんから送っていただいた。小高さんとはサンパウロで一度お目にかかったことがあり、私がユダヤ系ブラジル文学に興味を持っていることを、どうやら覚えていて下さったようだ。

さっそく封を開いて、一気に読ませてもらったが、1960年代半ばからほぼ20年つづいた軍政期のブラジルを舞台にして、「東欧ユダヤ系」の男が「失踪」した娘の足跡を追いかけるという一種のミステリー仕立てで、要するに「移民二世」である作家（クシンスキーは小説家というよりはジャーナリスト）が、自分と同じ世代の「移民二世」の身に起こった「不条理」な出来事をおもに「一世」（話者はイディッシュ語を話すという設定）である父親の立場から書いた「移民小説」である。

ところが、ベルナルドの父親らしい「移民一世」のことは、どこかで見覚えがあった。念のため『ブラジルのイディッシュ文学選』（1973）をひっぱり出してみたら、そこにメイル・クチンスキの名前があり、短篇二編が拾われて、巻末に略歴も載っていた。

《1904年、〔ロシア領〕ポーランド、ヴウォツワヴェク生れ。十人兄弟で、父親は靴屋ではあったが、博学で、職人や家主などの揉め事に仲裁人を務めるなどしていた。》（前掲書、p. 346）

『K』（原作は2011）には、《読者の皆さまへ／この本のできごとはずべてフィクションですが》と最初に断り書きがついているのだが、主人公の来歴は、このメイル・クチンスキのそれと大差ない。大戦間期のポーランドで成長した彼が《ポーランド警察に反政府活動の容疑で拘束され、ヴウォツワヴェクの街を引き回されたのは〔中略〕三十歳の時だった》（pp.36-7）というのも、ほぼ史実に即しているようで、1935年にポーランドを出てサンパウロに渡ってきたということだが、《他国に出国するという条件に加えて、闘争の同志たちが集めてくれた袖の下のおかげで釈放された》（p. 37）——これが、父から息子へと語り継がれた渡伯前の父親に関する家庭内伝説だったのだろう。

そして、サンパウロでもイディッシュ語ジャーナリズムで活躍し、ヴァルガス政権下で、ポルトガル語以外の出版物が禁止になった（日本語やドイツ語やアラビア語もだった）時期にも、東欧諸都市、そして第二次大戦勃発後はニューヨークに原稿を送っては、少しずつ作品を発表していたようで、上記の「略歴」にはニューヨークのイディッシュ語雑誌『未来』で、その小品が「特賞」に選ばれた（1947）というようにおめでたいこともあったと書かれている。雑誌『未来』といえば、アイザック・バシェヴィス・シンガーが「スピノザ学者」や「小さな靴屋」を発表した媒体としても知られる雑誌で、どうやらブラジル在住のイディッシュ語作家としては、同じ1904年のポーランド生れで、ブラジルに渡ったのも同じ1935年であったロゼ・パラトニクとも肩を並べる重鎮の一人

だったようだ。

実際、『K』にも、失踪した娘の手紙のなかに、《イディッシュ語のなかに逃避して〔中略〕ホーザ・パラー トニックという女性をまるで女王のようにして遇しているわ》(p. 51) という、往年の父親の姿が出てくる。彼がはじめての短篇集『ブラジル様式』を、テルアビブで刊行したのは、1963年であったというから、その翌年にブラジルの軍政期が始まり、まもなく娘(ポルトガル語作家ベルナルドの妹にあたる)が「失踪」するという悲劇が、60歳を過ぎたばかりの父親を襲ったという計算になる。

娘の突然の「失踪」を機に「探究」に出る初老の男(=K)は、大学を出て、化学者となる道を順調に歩んでいるかに思われた娘がコミュニズムに傾斜していったことにも気づかないでできた自分のことを深く悔いる——《自分がイディッシュ語に心身ともにのめりこんでいることへの反発だろうか？ この言葉は娘も二人の息子たちも話せない。子どもたちに伝える配慮をしなかったのは自分の落ち度である。》(p. 47)

じつは、「日系一世」たちが戦後のブラジルで「勝ち組・負け組」の抗争に巻きこまれているあいだに、ブラジルへの「同化」を進めた「二世」の一部が、左傾して、軍政期に同じく「失踪」したケースは少なくなかったと噂には聞く(そういう「コロニア作品」には今のところ出会ったことがないが、今年の4月に亡くなられた船戸与一の『山猫の夏』(1984)の「山猫」は、そのタイプを描き出した作品だった)。

Thursday

『K. 消えた娘を追って』には、訳者による力のこもった「解説」が付されている。訳者紹介によれば、《1970年より数年ずつブラジル、サンパウロ市へ、通算22年以上、ブラジルに住む。1974年から1976年までの2年間、サンパウロ大学人文学部社会学科に在籍」とあり、同時に《日本では「アムネスティ・インターナショナル日本」、「日本ラテンアメリカ子

もと本の会」会員》とのこと。要するに、今回の訳書は、まさに小高さんの人権運動家としての歩みの集大成とも言えそうだ。

その「解説」のなかで、小高さんは、著者のベルナルド・クシンスキーは《どうしても日本語版を、との強い願いを初めから持っていたよう》(p. 224) だと書いておられる。《理由は夫人の睦子さんが日系二世で、訪日の経験があるというだけではありません。何よりも、軍政時代に独裁政権に抗した若者たちの中に日系人の割合がとて多かったからです。》そして、日系社会をも巻きこんだ悲劇を当時ルポルターージュした本として、野呂義道さんの『サンパウロの暑い夏——日系テロリストの闘い』(講談社、1975)の存在を挙げて下さっている。さっそくこれも注文したので、手元に届いたら、あらためて紹介するつもりだが、いずれにしても、『K』の「消えた娘」、アナ・ホーザ・クシンスキー・シルヴァの周辺には日系人の姿が見え隠れしていたようなのである。それこそ、アナとサンパウロ大学で同級生だった日系人のカズヨという女性によれば、《いつも私の母の家に集まっていた。大学から近いし、皆、母の料理を楽しみにしていたのです。アナはすぐに日本食が好きになりました》(p. 225) ということだ。

また、アナが「失踪」したのは、1974年だったらしいが、「アムネスティ・インターナショナル日本」の「ニューズレター」によれば、1975年の春には、東京・渋谷の宮下公園で集会の後、ろうそくを掲げた行進が行われていたという——《マーチの先頭にはアナ・ロサ・シルバさんの写真(「屋根の上のバイオリン弾き」の作者ショーレム・アレイヘムの世界的研究者クシンスキ(ママ)を父に持ち、本人はサンパウロ大学の化学教授で、現在、行方不明)が掲げられ、参加者は手にブラジル政府に抗議するプラカードをもって行進しました。》(p. 223)

というわけで、本を読み終えた後、私は私なりに記憶を掘り起こしながら確かめられることを確かめてみたのである。そして、その「ショーレム・アレイヘムの世界的研究者」が、まさに前便で名前を挙げ

たメイル・クチンスキ(1904-76)であったということが分かった。彼はブラジルでも有数のイディッシュ文学通で、1966年にサンパウロで刊行された『イディッシュ小説』(1966)という分厚いイディッシュ文学のアンソロジーに、45ページにも及ぶ「序文」を寄せておられる。

シヨレム・アレイヘムやイツホク・レイブシュ・ペレツといった近代イディッシュ文学の大御所から、ハシェヴィス・シンガー(「ギンプルのてんねん」が収録)や、ブラジルのイディッシュ語作家、ロゼ・パルトニクまで、イディッシュ文学の傑作を幅広く拾い集めた充実の中身で、日本でもこのようなものが編めないかと思わず考えたのは、同書を入手した時だった。

そして、そこで手に入れたもう一冊は、今度はイディッシュ文学に限らないユダヤ系の現代作家を網羅した『二つの世界のはざままで』(1967)で、こちらの方は、カフカやイサーク・バーベリから、フランスのアンドレ・シュヴァルツバルト、米国のバーナード・マラマッド、南アのダン・ジェイコブソン、ブラジルのサムエル・ラヴェットまで、いわゆる「異教徒の言語」で文学に挑戦したユダヤ系文学のアンソロジーとなっているのである。

要するに、メイル・クチンスキの愛娘が「失踪」する前夜のサンパウロは、ユダヤ系ブラジル人の知的な求心力が高まっていた時期だった。同時期に日系ブラジル文化人もまた、『コロニア文学』の刊行(1966年創刊、1977年終刊)に全力を注いでいるところだった。まさにそういったエスニックな移民集団の文化的営為を足元から脅かすようにして、ブラジルの軍政は多くの犠牲者を生みだしていたのだ。

Friday

『K. 消えた娘を追って』でモデルになっている「東欧系ユダヤ人」のメイル・クチンスキについて、もう少し触れておく。

「日系コロニア文学」の大半がそうであったように(その意味で、最近ついにポルトガル語版が出たばかりの松井太郎の長篇『うつろ舟』は、例外中の例外なのだが)、ブラジルのイディッシュ文学も、その担い手は「一世」に限られたため、主題は基本的に「移民一世の悲哀」だと言える。ロゼ・パルトニク(1904-81)の作品でも、ブラジル到着後、まずは「行商」から始めるしかなかった東欧系ユダヤ人移民が、財を成して、会社を持つようになるにはなかったが、みずからの原点に立ち返ろうとしては踏み迷い、そして現地生れの「二世」たちとのギャップにも苦しむという、そうした葛藤は、東欧から世界に散っていったイディッシュ語を母語とした「移民一世」の表現に共通する特徴だ。

そして、そんなパルトニクを《女王のようにして遇して》いたというメイル・クチンスキの作風も、同じく「移民一世の悲哀」に終始していた。

ざっと目を通した「ムラート女」という短篇は、「セールスマン」や「訪問販売員」から始めて、次に「マットレス工場」を立ち上げ、ついには「家具王」の地位へと昇りつめた後の虚脱感を描いた短篇で、店によく来ていた「ムラート」(黒人の血の混じった白人)の人妻に浮気心を抱いたために、ずるずる足下をすくわれ、ブラジルの「反ユダヤ人感情」に怯えるようになっていくという物語である。

はたして、『K』のベルナルド・クシンスキーは、自分の父親がそのような小説をイディッシュ語で書き、イディッシュ文学の世界で、国外においても知る人ぞ知る存在だったことをどれくらい理解し、その残された作品に敬意を払おうとしていたのか、そこは分からない。

『K』には「文学の放棄」と題して、主人公がいかにイディッシュ文学に傾倒していたかをふり返りながら、イディッシュ語が《ホロコーストの前には一千万人以上によって話されていた》(p. 155) ことにも一般読者の注意を喚起する一文が差し挟まれている。しかし、そんな主人公が娘の「失踪」以降、《娘の

不幸をテーマに文学作品を書こう》(p. 157) という夢は果たすことはできなかったことに何よりも光を当てようとしている。主人公が、イディッシュ文学の延命のためにうつつを抜かしていられたのは、子どもなことなどそっちのけでいられたからだとても言わんばかりに。

章のひとつを「墓標」(マツェイヴェ)と題し、イディッシュ語の「墓標」という語彙をさぐりあてる努力を示しはしているのだが、それも申し訳程度にしか見えないのである。

「移民一世の悲哀」は、「二世」以降が自分の「母語」を理解してくれず、何かを書き残しても、それを読んでもらえるという希望を抱くことができないことにも由来している。これは、2009年に『うつろ舟』の松井太郎さん(1917-)にお目にかかったときも気づいたことで、彼ら「一世」は、「二世」以降から「理解」されることなど、のっけから断念しているかのようなのである。何より、ヘブライ語やイディッシュ語、そして日本語は、「二世」にとって並大抵の努力では習得できない言語なのだ(しかも『K』は子どもを残して亡くなった最初の妻の後に《ジャガイモ料理が上手だというだけの理由でユダヤ系ドイツ人の後妻》(p. 14)をもらっていたらしいから、子どもに生きたイディッシュ語を聞かせることもほとんどなかったに違いない)。

『K』のベルナルド・クシンスキーは、「一世」の父親の孤立感を描き出すことにきわめて熱心で、それが『K』の味わい深さのひとつにもなっているが、少なくとも、息子ベルナルドが父親の仕事の中身まで真剣にふり返ろうとしたらしい形跡はない。

「二世」なんてそんなものなのかもしれないと、少し寂しい気持ちになった。近づいてくる息子さんやお孫さんに、ぼそぼそとポルトガル語でしか話しかけられない松井太郎さんに感じたうら寂しさの記憶とともに。

Saturday

『K. 消えた娘を追って』は、全部で29の章からなっているが、「墓標」(マツェイヴェ)と題された章は、ブラジルの軍事政権によって誘拐拉致され、抹殺されたと思しき愛娘のために、墓を準備しようと決意した東欧系ユダヤ人の父親が、それまでは毛嫌いしていたラビの許を、わざわざ訪ねていくという場面を描いている。

この場面の会話が実際には何語でなされたものか、明確な記述はないが、イディッシュ語かヘブライ語であった可能性が高い。そして、保守的なラビは、政治的な理由で抹殺され、遺体も確認されていないユダヤ人の墓など建てられないと言う。

《貴方が欲しいのは墓碑ではない。貴方が本当に欲しいがっているのは娘さんを称える記念碑なんですよ》(p. 88)と言い放つラビは、ある意味で、出来事の本質を見抜いている。

しかし、このラビを訪ねていった「K」は、ラビがあまりに血も涙もない存在であることに愕然とする。

《我々の先祖たちは何のために墓碑を建てたのでしょうか？ 墓地が汚されないためです。[中略] 遺体がなければ汚されることもなく損なわれることもありません。墓碑を建てる意味もないのです。》(p. 87)

「ショア=ホロコースト」は、まさにこのようなニヒリズムへとユダヤ教徒を追いこんだ。遺体も勝手に処分され、「追悼のカディシュ」を唱えるはずの息子をも奪ったのがホロコーストだった。「K」は、大西洋をはさんだブラジルの地で、ユダヤ教の伝統が機能しなくなる事態に直面させられたのだ。

そして、さらにラビは聞き捨てならないことを言う——《ご存じのように、善人とともに悪人を埋葬してはならない、などたくさんの規則があります。マイモニデスは非ユダヤ人と結婚した者は我らの聖なる

地に埋葬されてはならないと言っています。》(同前)

「K」の娘は、「失踪」する前に、親に内緒で、異教徒の男性と結婚を果たしていた。だから、「K」としては啞然とするしかなかったのだ。

そして、このとき、「K」は、ちょうど1970年代、南米のユダヤ人のあいだで、話題に上るようになった「善人とともに埋葬してはならない」とされた一群の女たちのことを思わず想起する——《同じ理屈をつけてラビたちはポーランドから来た若い娘たちをヴィラ・マリアーナの墓地に埋葬させなかった。彼女たちに落ち度はなく、マフィアにだまされて連れて来られた貧しい娘たちなのに、これはひた隠しにされてきた悲しい話だ。》(同前)

「マフィア」とは、プエノスアイレスに拠点を置いて、東欧からおもにユダヤ系の女性を「花嫁候補」としてもらいうけ、南米の地で娼婦として売りさばいた闇の組織「ツヴィ・ミグダル」のことだ。

サンパウロでもそうした女性たちが、通常のユダヤ人墓地には葬れず、郊外(サンターナ/ショラ・メニーノ地区)に埋葬されたのだという。

ともかく軍政期のブラジルで、「不条理」に巻きこまれた女性が、それこそ「汚れた存在」であるかのように闇に葬られてゆく。著者のクシンスキーは、書くうちにカフカの『訴訟』や『城』を思うようになったというが、確かにこれは「悪夢の文学」である。

Monday

『K. 消えた娘を追って』は、1970年代のブラジルで、コミュニストとみなされて闇に葬られた「東欧ユダヤ人二世」の女性の消息を求めて駆けずりまわる「一世」の父親が疲労困憊の末、命を落とす話だ。

主人公は、ポーランド出身のユダヤ人で、最初の妻とのあいだに三人の子どもを設けるが、その妻は、ヨーロッパで起きた惨劇に骨の髄までうちのめされ

る——《二人の男の子を産んだあと、女の子を妊娠したときには》(そのおなかのなかの子が後に「失踪」することになる)《母親はすでに悲しみに打ちのめされていた。〔中略〕母親の家族は〔中略〕殺されていた。全員だ。両親、兄弟。伯父叔母。甥や姪たちが一人残らず殺された。〔中略〕それより前にフランスに行っていた従兄弟のモーゼスさえ逃れられなかった。》そして、そんな頃、母親に《乳がながみつかった》のである(pp. 40-1)。彼女は「ホロコースト」の派生的な被害者のようなものだった。

ところが、そんな「K」(＝メイル・クチンスキ)が後妻にもらったのは、同じユダヤ人でも、今度はドイツから来たユダヤ人女性だった。「東欧ユダヤ人」が「イェツケ」と呼び、遠ざけがちだった「ドイツ系ユダヤ人」。イディッシュ語とドイツ語でも会話が成立しないわけではないが、なかなか打ち解けあうのは難しい。

クチンスキは、「ドイツ人」のクリスチャンと結婚している「ドイツ系ユダヤ人」が、跡取り息子がいないのを気に病んで、ドイツ語で悩みを打ち明けてくる「カディッシュ」という短編を残している(そこではイディッシュ語とドイツ語で会話が成立している)が、「東欧ユダヤ人」にとって、「ドイツ人」や「ドイツ系ユダヤ人」の存在は、近いようでいて遠い、遠いようで近い、悩ましい存在だった。

じつは、息子のベルナルドが書いた『K』(2011)のなかにも、「ドイツ人」や「ドイツ系ユダヤ人」が強い存在感を示す箇所がある。

「失踪」する前、「K」の娘のアナは、サンパウロ大学化学学部の助教授をしていた。学部の創設者は《ナチスから逃れてき》た《ドイツ人科学者》(p. 175)であった。ところが、とつぜん職場にあらわれなくなったアナを、ついに学部教授会は「罷免」する。その教授会で議長を務めたのが、やはり「ドイツ人」のギースブレヒト教授。逆に、この学部長のやり方に敵意を燃やすのが、《ナチス侵攻の際にチェコスロヴァキアからやって来た》という「ドイツ

系ユダヤ人」のゴットリーブ教授である。

教授会を戦場にして、「ドイツ人」と「ユダヤ人」のあいだに小さないさかいが生じる——《あの娘は拉致されたというのに、大学はまるで怠け者が職場放棄をしたかのように解雇しようとしている。まったく恥知らずだ。》(p. 183)

『K』の「解説」のなかで、記者の小高さんは、《家族、同僚、友人たちの長年の運動が実を結び、2014年4月教授会は解雇処分の撤回を全会一致で決議し、家族に公式に謝罪しました》(pp. 220-1)と書いておられるが、それもそのはず、『K』の作者、ベルナルド・クシンスキー(アナの兄)は、左派のルーラ大統領の下で顧問を務めるほどの実力派だった。そして、現在のブラジルでは、その「罷免された准教授」がユダヤ系であったとか、なかったとかは問題ではないだろう。少なくとも、ブラジル人としての彼女の名誉は40年もの年月かけて、ようやく回復されたわけだ。

しかし、「国民統合」が急速に進んだ今でこそ、ブラジルで国民ひとりひとりの出自が問われる機会が減ってきてはいるものの、40年前のブラジルでは、何かと出自が、どこの場でも派閥めいたものを形成する空気があったのだろう。米国では、「ジャパニーズ・アメリカン」、「ジャーマン・アメリカン」と呼び慣わすところを、ブラジルでは、ブラジル生れのブラジル国籍保有者が相手でも「ジャポネズ」「アレマウン」と呼び慣わすあたりが、いかにもブラジルのものだ。

そして、父親のメール・クチンスキも、息子のベルナルド・クシンスキーも、「東欧ユダヤ系」というアイデンティティをどう背負って生きていくかで苦難の道を歩かされた。娘のアナの場合もそうであったに違いない。

『K. 消えた娘を追って』が細部に至るまで読み応えがあるのは、そういったブラジル史の裏面にさまざまな角度から光を当てる作品だからだ。

この本が日本にも紹介されたのは、いろんな意味で嬉しい。

ブラジルの現代史を知るだけでなく、「東欧ユダヤ人」のディアスポラを知る上でもう一つつけの書である。